
師匠とわたし

満月氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

師匠とわたし

【Nコード】

N3040P

【作者名】

満月氷

【あらすじ】

とある天才魔法士の冷徹師匠と弟子である獣人なわたしの旅(?)。
まあ、旅なんてそんなにしてませんし、私に雷撃ちすぎな師匠や、私には変態なお嬢様や、変態さんに好かれるわ……ツツコミどころが多すぎですっ!!

(1)・1 師匠の雷パーセンテージ

今日の宿はここ、レインドロー侯爵様の客室。

たいてい私と師匠は野宿、もしくはどこかの宿で寝泊りだけど、こくたまに師匠の名声を聞いて招待してくださるお貴族様もいる。

「それにしても素敵なお部屋ですねー、師匠」

師匠が私にだんまりなのはいつものことなので私は気にせず喋る。

「こんなに綺麗な部屋がたくさんあったら眩しすぎて目が大変そう。お食事も食べきれなくて残しちゃったのはもったいなかったなあ」

「そんなに気に入ったならここで」「嫌ですよ」

師匠の言うことはいつも決まってるので私は途中で遮った。

「何度言われても私は師匠について行きます。置いてかれたって絶対に追いかけますから」

師匠は何かと私を邪険にし、粗末に扱う。

過去何度置いてかれたことか。

でも私には獣人族特有の耳と鼻があるのだ。

師匠は足音をたてないけど私の耳は確実にその音をとらえる。
鼻だつてきく。

置き去りにされたつてどこまでも追いかけてついて行くと私は決めたのだ。

でも私はまだまだ未熟（子供ともいう）で、集中しなければ師匠だけではなく普通の人の気配も感じることは出来ない。

「失礼致します、ギルバート様、リイブ様。湯浴みの用意が整いました」

ノック音の後に聞こえる若くて意志がある声。

・・・というか食事の後にお風呂つてどうなんだろう。普通、食前では？

まあ食事が先に出来たなら仕方ないけど。

「じゃあ私が・・・」

と、私に気を使うこともなく師匠はさも当然のように先に進んだ。

「・・・ちえ」

師匠が先に入るなら待たなければならない。

別に気を使っているわけじゃない。

前に師匠が入ってる間に私が別の場所でお風呂に浸かっていたら後

々で怒られた。

それも怒鳴るわけではなく無言で睨まれるからさらに怖い。

しかも雷撃たれましたよ。いや、冗談じゃなくて本当に。

もちろん本気でやったら私燃えカスになっちゃうから多少手加減はされてるんだろうけど、これは本当に痛すぎる、熱すぎる。

シュウシュウいったよ。

「・・・誰が荷物を放れと言った」

「う、うう……。す、み……。ま、せん……」

師匠の荷物はすごく少ない。

というか手ぶらに近く、持つのは軽く目立たない、かつこいいポーチだけ。それも大人の片手くらいの大きさ。

なぜなら師匠の指輪の一つに、仕組みはよくわからないけど亜空間？らしきものがあり、その中に自分の荷物を収納している。

ただ、よく使うものだけはポーチに入れている。

だから、もしそれが盗まれるようなことがあれば非常に困るらしい。

・・・慌てふためく師匠は想像できないけど。

で、お風呂に入ってる間は外さなければならぬ。

だから私にちゃんとみてるという意味で怒っているのだろう。

幸いポーチは無事だった。

それ以来、私は師匠がお風呂からあがるまで一人荷物番だ。

・・・多分、さぼってもばれそうだし。

「・・・・・・・・、早くお風呂、入りたい」

もう四日も入ってない。

泥どころか汗臭いし、自慢の白く長い髪もばさばさ。服だって洗いたい。

師匠早く戻ってこないかな。

(1)・2メイドさんは早さが命

コンコンと軽く控えめなノック音。

師匠はまずありえないから最初から可能性の中から打ち消している。

「何かごようですか？」

「失礼いたします。侯爵様からのご所望でよろしければ私の部屋でお話をしたいとのことなのですが・・・」

ドアごしでさつきとは違うメイドさんの声がする。

「あ、でも今師匠いませんので・・・」

「でしたらリイブ様だけでも」

「で、でも、荷物を見てないと・・・」

「でしたら誰かを見張りにつけさせますので」

「だ、駄目です！私が師匠に怒られちゃいますから！そ、それに私汚れてますから！」

「・・・、・・・わかりました。では少々お待ちいただけますか」

と、急にドアの向こうから声がなくなってしまった。
自慢の犬耳に意識を集中させて廊下の音を聞いてみた。

・・・足音が早く遠ざかっている。

あの様子だと主人に聞きに行つたのかもしれない。

「・・・行つたら、確実に怒られる」

師匠は休むときはしっかり休む人だから多分30分以上は戻らないだろう。

もし戻ってきたとき、私が居ないのを師匠が見たら・・・・・・・・・・。

・・・こ、こわいっ！！遠くからでも雷が絶対くるっ！

私がもんもんと悩んでいたら本日3回目のノック音。
さっきのメイドさんだった。
さすがメイドさんは早い。

「公爵様が、汚れは気にしないのでよろしければ私がリビング様方のお部屋を訪問しても、とのことなのですが」

・・・あやしい。

どうしてそこまでして会いたがるんだろう。

師匠目当てだとしても今は私しか居ないと伝えている時点で諦めているはず。

・・・でもまあたとえ私しか居なくても何も起こらないよね。まさか私の目の前で師匠の荷物を盗むわけじゃあるまいし。

・・・というかそんな度胸あるのかな？

たとえそうだとしてもそんなことさせないけどね。

こっちだって荷物守ることにいろんな意味で命懸けてるんだから。時計を見ると師匠が戻るまでだいたい20分くらい。

「・・・師匠が戻るまでの少しなら」

・・・師匠が途中で帰ってきたら、どうしよう・・・。

(1)・3 侯爵様はわかってらっしゃらない

「失礼しますよ」

そう言って入ってきたのは人生の半分を過ぎたような顔をした侯爵様。

ええ、本当に失礼ですね、わざわざ師匠のいないときに来るなんて後で被害来るの私なんだから。

「侯爵様、手短にお願いします」

「わかってますぞ。しかしそんなに急かさんでも・・・」

あ、あなたは何にもわかってないからそんなこと言えるんです！

「お話とは？」

「実は、話というより相談なんだが・・・」

ただお喋りに来たんじゃないのは勘だけどわかっていた。
というか今までに行った家の偉い人、ほとんどの人が同じように呼び出してみんな同じ相談事言ってるし。

「まず第一にギルバート殿を私のもとで雇いたいのだが」

やっぱりね。

しかも第一って、複数あるの？

「まず、無理ですね。師匠はひとつの場所にいるの嫌いなんです」

「どうしてもかの？」

「ダメです。多分縛り付けても、脅しても効果はないです。．．．
そのかわり、報復が、きまずけど」

師匠いわく「正当な罰」を思い出し、何故か私が冷や汗。

「そうか．．．。では次に、」

あれ？やけにあっさり引き下がった。

それが本命じゃないのかな。

「ギルバート殿の魔法具を高値で買い取れた「無理です！」」

侯爵様は叫びだした私にびっくりしていたがそんなことどうでもいい。

あ、あなたはなんのために私がここで一人残っていると思っているんですか！

塵一つ盗まれないように見張ってるんですよ！
つまり師匠が他者にあげるものはないんです！
そして、それを私に言われても困ります！

「・・・これも駄目かの？」

「ダメです、無理です。どちらかといえばさっきの質問よりもNOの確率が大きく、ゼロに近いです」

私の連続ダメだし攻撃にさすがの侯爵様も少し機嫌が悪くなる。

「・・・じゃあ第三に」

まだあるのですか。

「獣人であるライブ殿を買い取りたいのだが」

興味の矛先が急にかわりましたね。
というか今までにない質問だったから戸惑うよ。

「・・・、・・・あ、え、え〜っと、師匠は、ダメ、とは言いません

んね。むしろ売ると思います」

「では」「でも」

「でも、私は師匠について行くと決めてるんです。拾われた時に、ちゃんと成人するまでにはついてくんだと。・・・絶対に。だから、ごめんなさい。私を買っても脱走するし噛み付くわであんまし意味ないです」

侯爵様は落胆したようで顔を伏せてしまった。

・・・さて、ここで今までのお偉い人は三択に分かれる。

そのいち、商談を諦めて部屋に戻るか、せめてものお詫びとして豪勢なものを振舞ってくれる

これが一番ありがたいな。

そのに、諦めたかのように見せかけて腹いせに陰から迫る。いわば闇討ち

これはまあ私でも殺気という気配でわかるから別に何でもない。

問題はみつつめ。

師匠はともかく私にとって一番厄介なタイプ

これはやめてほしい。

「…ふむう、そうですね。あなたが脱走するのではしかたがありません」

よかった、わかってくれたのか…な？

あ、あれ？なんで侯爵様ににじりよって来てるんですか？

「残念ですなあ…。こうしなければならいなんて」

悪い予感大当たり。

…この家結構住み心地よかったのにな。

師匠戻り時間まで残り5分もなかった。

(1)・4 したくもない蛇觀察日

「…え、え〜っと…ですねえ…」

「何ですか？」

「ダメだ。絶対に言うこと聞いてくれなさそう。」

それ以前にまず相手の手の色が変わってるんだけど。

きっとこの人も私と同類か。

「よし、師匠をまきこもう。少なくとも荷物を完全に盗られるよりは罰が小さい……………はず。」

「食って骨にして磨いて売り出してくれるわ小娘がーっ！」

こまかつ！

確かに私みたいな獣人は貴重だから骨でも高値で売れるかもしれないけど、なつてたまるか！

『半人』にも色々いるけど、侯爵様は完全変異なタイプなのかな？
私はすでに半分変化の完全形体無しな半獣だし。それにしても侯爵様大きいなー…。

というかでかいよ！さっきまで私と師匠の間くらいの身長だったのに、なんでこの広い部屋の半分くらいになるの！？

「えいつ！」

完全に大きな蛇に形を変えた侯爵様から逃げるために、私は師匠を真似て作った出来損ないの玉を侯爵様の足元に投げつけた。

名付けて、『アカア力はくしょん』！…これ、師匠に話したら、睨まれました。

玉の中からでた大量すぎる赤い粉が部屋中に充満しくしゃみが止まらない………と思う。

あまりにも吸いすぎると死に至る………はず。

人間にはひとたまりもない………ように作ったはずなんだけど自信はこれっぽっちもない。

「きかんつ！」

ですよねー。自信ない上に相手、蛇だし。

蛇つてくしゃみするのかな？

「ござかしいっ！」

それにしても侯爵様さつきからありがちなセリフばかりだな。

でも幸いなことに、くしゃみはしなくても出ばなをくじいた大量の赤い粉は侯爵様の視界を…

「…あれ？」

これひょつとして、私もやばくない？
私、まだ吸ってないけど獣人って一応人でもあるから…。

「ちょっ、やばい！」

なんというバカなんだ私は！
師匠の荷物は持ったから、薄め涙目の侯爵様より早くドアに行かないきゃ！

「おのれえ、小癪な！」

大丈夫、ありがちな人なんかより断然間に合う！
…って、ええ！？ドアが勝手に開いた！
……………ま、さか……………！

「失礼致します、侯爵様」

な、なんだ、さっきのメイドさんか…。師匠かと思って心臓が止まりそうになったよ…。
騒ぎに気づいて見に来たのかな？
いや、でも蛇になった侯爵様に驚かないし、この人の手馴れた感じを見ると侯爵様の正体や真意を知っていたのか…。
あと、侯爵様、ってことは私に用はないのかな？

ナイスタイミングー！隙をみて逃げよう！
とりあえずー安心

「……………」

……………じゃなかった、全然まったく。

「ギルバート様をお連れいたしました」

バッドタイミングーッ！なぜ今この瞬間！？

師匠の観点だと多分こんな感じ……………。

侯爵様。

召使はこの爬虫類を侯爵様といったのだからそうなのだろう。
だがなぜ自分の部屋にいるのか。

わたし。

荷物を守れといわれたのに目の前で狙われていたかのような
失態。

しかも今かなり安心顔をしていたがよもや自分を巻き込もう
としているのでは。

召使。

蛇を見ても驚かず自身の仕事をまっとうしようとしている。
関係者疑惑。

室内。

自分が見慣れた赤い粉が辺りをただよい、それは風呂上りの
自身に降りかかる。

…そして、師匠は……。

……バチ

…師匠の、足元から、電気が……。

終わ、った……。

しかも、私も同罪のつもりですか師匠！？
どんどんそれは、音は、数は、増えていく。

師匠、私はあなたに絶対についていくと心に誓っています。ですが、
今だけは逃げさせていただきます。

…師匠はまず先に、私を狙ってきそうですから。

(1)・5 皆々様による大運動会？

きゅん！

……そんな可愛らしいものじゃ済まされないよ、この状況。もう呆れと疲れと恐怖が合わさって何も言えない。

私、走ってます。もう疲れた。

師匠、走ってます。見た目疲れてないのが怖い。

侯爵様、走ってます。目をぎらつかせて疲れ果てているように見えるのは歳のせい？

メイドさん、走ってます。大きな足音を立てずに、顔は静かに。というか他の人はともかく、よく私について来れますね。

…私以外は誰かしらを何かしら考えて追いかけてます。つまり私が先頭。

いくら師匠でも本気を出した私の獣の足には勝てませんよね！そうであれ！

「待たんかーっ！」

「……………」

「お待ちください侯爵様。はしたないです」

皆が敵。しかも私は誰に捕まっても終わりというかなり過酷になってる…。

ちなみに、私＞侯爵様＞師匠＞メイドさん、になって走ってる。

侯爵様は多分わかってるんだろっなあ…、師匠相手に勝てるわけ

がないことを。だから私に狙いを定めてさつきからあえて後ろを見ないのはそのためかも。

メイドさんはメイドらしく『蛇で歩き回るな』と言いたいんだろ
うな…。でも今戻ってぎっくり腰にならないかな？

師匠が誰をターゲットにしているかなんて言うまでもない。

…だ、だって、後ろの一人はともかく前方の一匹を、視界に入れて
ないことが、ありありとわかるから…。

すみません！すみません！

勝手に調合品使ってごめんなさい！こつそり製法を盗み見てごめ
んさい！

「師匠の魔法具にこつそりちよっぴり触れたこと謝りますから！」

チュドーーンッ！！

雷がー！！すぐ後ろで落雷が発生した！自慢の長い髪のが焦げち
やいましたよ！

…止まったら、確実に殺される……！

ととりあえず師匠の見えないとこまで加速っ！どこかに隠れな
い。

「…お待ちくださいと申し上げておりますのに」

あれ？なんか、声質が、変わってません…？
見るのすら恐ろしい師匠の後ろをゆっくりと見てみると……………なん
か毒々しいピンクの巨大蛇がいた。

気持ち悪っ！

何あれ、とか、増えてる、とか、あれメイドさんだよね、とか、思
うよりも色がまず気持ち悪い。

想像してみてください…。蛇の頭から尻尾の先までにいくつもの薄
いピンクの筋やところどころに赤の鱗、目は濃いピンクなどなど…。
彩り気持ち悪すぎる！！

しかも侯爵様よりではないけど、そこそここかい。

「うえ……………」

しまった！よたついちゃった！

チュドーーーーンッ！！

…このまま走っていたら私がいたであろうところに、降ってきた。
…何が、とは聞かないで…。

「…楽に、逝かせてやる」

逝かす！？師匠手加減してますよね！！そうですよねっ！？
気づけば屋敷にいるであろう後者熊の召使達がおのおの独特な、個性的な、ぶつちやけ気持ち悪い爬虫類姿で師匠の後ろにいた…。
何この追いかっこは。

(1)・5 皆々様による大運動会？(後書き)

リップの髪はふくらはぎまでの長さです。

(1)・6 汚さリミット(前書き)

なんか私の思っていたよりも話が進むので
一応不定期連載を取り消します。
なりそうな時はお知らせしますので。

(1)・6 汚さリミット

…もう、行った……？………行ったよね、うん。
ようやく、ようやく、ようやく！師匠をまいた！

何ですかあなた様は！お歳のせいで弱った侯爵様やメイドさんもと
い爬虫類さんたちをまけたのはいいけど、私が部屋に隠れようとす
ると距離を離れたはずの師匠がすぐに入ってくるし、衣裳部屋に隠
れれば一列一列雷で一氣に確認しようとするし！

おかげでこの家の侯爵様やその奥様らしき服、ほとんど燃えちゃっ
たじゃないですか！

普段けち臭いのにかういうときだけ容赦ない。

……これはそうとう、怒ってる。

ちなみに今私は書庫に入って手前のテーブルクロスの下に隠れてる。
クロスをひいてるし本が積み重なってるから傍目からは見えな
いし、さすがの師匠も貴重な資料や未発見な書物があるかもしれ
ないこの場に落雷はできないだろうというのが私の勝手な考え。
にしても師匠、本当にしつこかったなあ……。………なんで？
いくらなんでもあんなには…

「……………はっ！あつ、……………くあ……………！」

危うく大声を出しそうになったから危ない危ない。
では氣を取り直して心の声で、せいの、

あーっ！師匠のポーチ持ったままだったーっ！
これじゃ盗んだも同然じゃないか！だから師匠はあんなにも……！

どどどどうしよう……。このまま逃げ回っててもらちが明かないし、その前に師匠が完璧にぶちギレる。

だからといって素直に渡しに行っても、獵師の目の前を獣が歩くのと同じこと。何か言う前に……うん、問答無用、か……。

あ！ポーチだけ師匠の見える場所に……。ダメだ、私がほとぼりが冷めてから姿を現しても師匠は同じことしかしないだろうな。何にしても私には地獄しか残されていないのね……。

「もう、いやだ……。お風呂入りたい」

泥臭いし、汗臭いし、粉っぽいし、焦げ臭いし……。一部は私が原因だけだな。

獣人として荒っぽいことには慣れてるから数日間お風呂に入らないのはどうってことないけど、……。これは、さすがに、汚すぎる。

……。キッ……

……。？何か扉が開くような音が……。あ、この部屋でないから心配ナツシーングだよ。

多分この音は、……。玄関、かな？

どうしようか。見に行く？気にしない？師匠の地獄？爬虫類の地獄？あ、『爬虫類の地獄』必然的に師匠の地獄』になるからどっちにしても地獄か。

早く行かないと謎の音の正体は闇の中だしなあ…。

………よしっ！やめよう！

普通はここはもつと『あの音は何なんだ？』とか『こうしちゃいられない！』とか『危険だけど気になる！』とか思う場面なんだろうけど、私はそう思う前に思考に危険信号がかかる。

何てったって、………今この時、好奇心よりも勝るものがたくさんあるから…。

でも私はその時、耳を疎かにしていたので気づいていなかった。…『その人』がこちらに近づいている時点でどちらにしても師匠の地獄に繋がってしまうことに。

(1)・フヤンデレは美少女

かなり気になるけどここは我慢我慢我慢……

……カチャッ……

っ！……誰か、きた……！

……スッ……スッ……スッ……

……この衣擦れ、だれ？

師匠は無音だし、侯爵様やメイドさんたちは蛇のはず。人間に戻ってたとしてもこんな大人しい音じゃないはズドシャアアッ！！

……えっ？

「……に……気配が、する……」

え、え、え、え、……っ！？何がどうなったの！？

私、机の中に隠れてるけど気配消すのは結構得意です。
私、この女の人らしき声は初めて聞いた。

……今、目の前におどろおどろしい黒い剣が突き刺さっています、机を突き抜けて。

つまり、……狙われた？明らかな、敵意？

「ここに、いるっしやるんでしょ…？…怖がらないで、出てきてください……。怒って、ませんから」

怖い、怖いよーっ！師匠と同じくらい！

……はっ！嫌な気配！！

「えいつ！」

机を蹴り上げると同時にバックステップすると、さっきよりもリアルな音が近くで聞こえた。

…危つく、頭から串刺しになるところだった……っ！

師匠の親戚って言われても納得しそうなほどの潔い行動。

「……………あら？…まちがえちゃったっ」

ひょとちうが…！！

そんなテへって顔するなー！！茶目っ気を入れたって無駄！反省の色が全く見えない！！

「やるにしてもちゃんと確認してからにしてください！」

いやこれもどうだろう、わたし。

「ごめんなさい……。怒りのあまり、つい……」

やっぱり結局怒ってたんじゃない。

私を殺しかけた人は気のいい穏やかな口調をする……八歳くらいの子。かなり大人びてるなあ……

剣を突き刺すときこの子はどんな顔をしてたんだろう。これでその物騒なものを持つてなければ誰もが恋しそうな女の子なのに。

ただ、口調からなんとなくため口がはばかれるようなオーラがある……。

「まったく……で、何してたんですか？」

「実はここにねえ、私の好きな人がいるから捜しているの。恋人でね、心も体もすごく素敵な人……」

武器を持ったまま目はハートがとんでる。

……この子、危ない人だあ……

だって私を殺そうとしたもん。勘違いだったけど好きな人に完全な殺意があったもん。

というかわけわかんない。好きな人なんでしょ！？何で殺しにまで行くの？それほどの怒りって……

「でも、何でもその人の周りに雌豚がいるみたいなの。…あ、豚に失礼ね。彼のまわりに『ゴミ』があるみたいだから排除しようと思っ
て今日はこっそり、ね。ふふっ」

「笑い事じゃありませんから、それ。いくらなんでも女性殺しは…」

「え？……………あつ、ち、ちがうのよ。女の子を殺すなんてそんな残忍な…。普通にお家に帰そうと思っ
て来ただけよ！これは……………逃げるあの人を地面にとめるための、ただの道具」

道具にしては危なすぎます。

『 じゃないよ 』 じゃ。

「心配しなくてもあの方はこれだけで死んだりしないわ。……………でも、あの人を殺してしまえばずっと私のモノに……………。ふふ、冗談よ。私があの人を殺すわけじゃないじゃ」

この人ヤンデレだあー！！

だから可愛く言っただけです！

あなたが言う冗談に聞こえないんですよーっ！！

(1)・8 歳をあれこれ言っではいけません(前書き)

あとがきのほうでちょっとめんどくさいこと言ってるので
嫌な方はとばしていいです(汗)

(1)・8 歳をあれこれ言っではいけません

「そういえば相手はどんな人なんですか？」

相手が大人びているのだから子ども扱いは厳禁だと思い、普通に接することにした。

「さっきも言っただけとても素敵な人よ。幼なじみでね、結婚の約束もしてるの。すっごく優しくて……残念なところは、ちょっとわがままなところかしら。あ、次の突き当たりに三匹いるわ」

「じゃああつちから行きましようか」

優しい……、相手が師匠かもという可能性はこれで消えた。じゃあ侯爵様の息子とか？

侯爵様見た目高齢だからいそう。

とりあえず私はこの子と行動することにした。万が一師匠に見つかっても何とかしてくれそうだし。

この子見た目は子供なのに、剣を軽々と持ったり、耳や鼻が私よりもすごかったりした。

……何となく自信喪失しました。だってこれが『彼を追いかけるための修業の結果』なんだよ！？

ヤンデレに、年下に、負けた！しかも彼女の修業目的『彼を追いつける』が私となんか似てるし……！

「…ところで、私聞いてなかったけど、あなたは、まさか、あの人にねえ…？」

「ないです、むりです、ありえません、却下。さつきも長々と話しましたように、私はそんな人に付き合ってる暇ありませんから！」

「確かお師匠さんについていくんだったわよね。…そうよねえ、あなたはあの人の女にはなりそうもないわよねえ。あなた結構若いし、汚いし」

さりげなくひどい。しかもあなたのほうが若いですから。私人間年齢で14歳だけどあなたは8歳前後でしょ？

「…歳はあなたに言われたくありませんよ」

「……？…あ、ああ。言い忘れてたわ。私はこれでも三十路よ？姿を変えてるの〜！」

大人びてるのではなく大人だったのか！
その口調もおばさんだから？

…口にしただけで、殺されそうだ……。

「あなたも聞いたことがあるでしょうけど、魔法具の中には見た目を変えるものがあるのよお。といってもただの幻覚で本当に若返ってるわけではないのだけれど。今の私は八歳のころの私。この方が

行動しやすいのよねえ」

確かに。

剣さえなければ見た目はただのか弱くかわいらしい美少女。

だが、その実態は彼のためにと心も体も鍛え上げられたヤンデレお
ばはん。

「…何か失礼なこと、考えてない？」

「いはいはいはいえ！何も何も何も！！」

(1)・8 歳をあれこれ言っではいけません(後書き)

この世界は、「普通の生き物」か「人と生き物のハーフの『獣人』」
しかいません。

つまりただの人間はいないんです。

寿命は人間と同じで産まれた子どももみんな獣人です。

<半A+半B 半A or 半B>

獣人たちも、変化してからなる『変化タイプ』と、
見た目からすでに人間にも生き物にもみえる『混ざりタイプ』がい
ます。

めんどくさくて本当にすみません！

(1)・9 乙女(?)に不可能はない

「ところで私は獣人ですけどあなたは半人ですか？えっと…」

「あらあ、まだ名乗ってなかったわねえ。うーん……………じゃあ、とりあえず、『謎のビューティフルフロッグちゃん』とでも呼んでね！」

あなた本当に三十路ですか？

しかもたったこれだけでこの人の正体がわかってしまったよ。
この姿が子供の頃っていつてたから半人なのは間違いないんだと思うけど。

というかなんでこの屋敷爬虫類とか両生類ばっかなんだ。

「じゃあ略して『謎のビーフちゃん』で」

「…あなた、一言余計って、よく言われなにかしらあ…？」

きあー！すいませんー！！

その手のモノ抜かないでー！！

あまり大きな声で言えないから、目で訴えるしかないですよ！
でもどうやら伝わったらしい。

「…はあ…………。それで呼ばないんなら、許してあげる……………」

ああ危なかったあ……。

「…その、本当に、ごめ」

「っ…！ストップッ…！」

「っ…！…！」

んなぁッ！ちょ、ギブギブタンマタンマタンマーっ！！
くくくびに、くびに、あと数ミリ、刃がーっ！！

「……………！…この、におい、この気配この感覚、は…あ…！」

一人納得してないで早く早く早くおさめてー！！

少しでも動いたらあなたうつかりで本当に殺しそう！そして『あ、
やっちゃった』ってしてそう！

…うわ、これ冗談じゃすまなそうだ……………！

「みつけたわあ…！私の愛しい人…！今、今行くわねえ！」

あ、走って行っちゃった………って早アッ！
で、でも、助かったあ！

…でも、目がどこか危なげで黒の剣をザリザリ引きずってよだれを

少し垂らしながら速く走り迫ってくるのを、前方から見た者からしたらどんな気持ちだろう…？

いくら爬虫類でも怖いものはこわいだろう。

でも顔は女の子らしく上気していて、声は怖いけどどこか愛に満ちてる。

よっぽど好きなんですね…。でも、制裁はやめないんですね？

「邪魔アツ!!」

あ、逃げてた二人のメイドさん(?)が跳ね飛ばされた。

(1)・10 秘密の会話

「侯爵様、大丈夫ですか？」

「げほっ……う……あの小娘、なにを……う……涙が……ごほっ」

「だ……いじょうぶですっ。医者私が、しっかり体の隅々まで治してあげますから。さあ早く蛇でも老人でもない姿に戻ってください。そして……十歳の頃の侯爵様が、みたいなあ……っ」

「この、シヨタコンめ……。俺に対して、それは、失礼では……」

「だって侯爵様の本体はもうおっさんなんだもの。そんなことよりその魔法具で早き若かりし頃を見せてください！前こっそり盗み見た昔の侯爵様のお写真がもう可愛すぎるのなんの！！それ以降私は侯爵様をそういう目で見てきましたあ！」

「……このド変態め、何を勝手に……。後で、覚えていろ……！」

「もちろん少年侯爵様を見たなら忘れられませんよ！中身親父でも見た目が美少年ならもうかなり萌えますから！悶えます！偉そうな少年力モン！」

むしろストライク!!!

ハァー…ハァー…。そしたら、そしたらあ……あ、あんなあ…こんなあ………!」

「うわっ!は、鼻血をとめろ!」

「ああ、いけません侯爵様!先程の老人みたいな口ぶりをしてください!あの少女を騙すためにと使っていたとき、私はあれが十歳であればと想像するだけでもう、もう……抑えるのが大変でした!」

「どうでもいいから早く薬をうて!ぐ…早くあの小娘を…」

「侯爵様が姿を私好みに変えてくださるのなら、いいでしょう!…でも、なぜ人にもどらないのですか?どちらにしてもやりづらいです」

「………もとに戻ったら、どうするつもりだ?」

「変化するまで手術室でかんき」「黙れッ!」

「…まあ、それは冗談ですので置いといて、前々から聞きたかったですけど、侯爵様はなぜあの方から距離を置いてるんですか?二人しかいないこの時だからこそ知りたいんですけど」

「……っ！」

「あの方は侯爵様を束縛なんてしませんし、私と違って白状でもありません。あの方はあなたに心から愛してもらうために一切わがまはいいません。大人になっても純粋で正直でおちゃめで可愛くて考えが真つすぐすぎるくらいです。その証拠に、あなたと一緒にいたい、という思いだけであそこまで強くなりました」

「……………」

「…本当は好きなくせに」

「…違う……っ！」

「たとえあの方が本当に怖くてもあなたが浮気をしなければいいだけじゃないですか。何も彼女はあなたが他の子と話しただけで襲いかかるわけじゃないんですし。彼女は浮気以外では他では勿体ないほど心が寛大ですよ。あなた自身だけを本当に愛してますから」

「…私は彼女の制裁だけは心の底から恐ろしいんだ」

「…あいつとかあの野郎とか言わないあたり、やっぱり好きなんじゃないですか。それに制裁以外はどのおもってるんですか？」

「っ！！」

「それでよく何年も婚約者なんてしてますね。あの方が何も言わないからって。情けない…」

「……………」

「……………」

「……………はあ。…しらけちゃいました。さて、侯爵様、そろそろいい加減もとにもどってください」

「……………あ、ああ」

「ついでにやりやすいよう、うつぶせに」

「…わかった」

「さあ魔法具で十歳に」

「わかつ……………待てっ！なんで馬乗りになってる。注射だけのはずだぞ！！」

「ああ……………私好みの運命の美少年を私が押し倒してらう……………！」

「俺は今老いた蛇なのにどこが美少年なんだっ！！運命でもなんでもない！」

この時、『謎のビーフちゃん』によって勢いよく扉が蹴破られたのは、彼にとって幸か不幸か……………。

(1)・11 蛇に睨まれた蛙……え、逆？

「なあに、してるのかしらあねえ……？」

「……………」

ザ・修羅場ってやつなんだろうか？よくわかんないけど。

急いで追い付いた私だけど、……………何、やってんだろう……？本当になぜか半壊してるドアの向こうには、蛇姿の侯爵様の上に鼻血垂らしてる白衣の女性が座ってる。

座ってるんだけど、……………私的には暴れる蛇を押さえ込んでるようにしか見えない。

多分これが普通の反応だと思う。他の人もきっと同じことと思うから私がおかしいわけではない。

「……………それは、浮気と、みなして、いいかしらあ…………？」

やっぱりこれってそういう状況なの！？

『謎のビーフちゃん』の背後のすごいオーラからまさか、まさかね、まさかな、とは思ってたけど。

何と言うか……………どす黒いのオーラの一言だね。

私後ろだから見えないけどきつといい笑顔なんだろうな……。

可哀相に……………侯爵様固まつてる。

女医さんみたいな人は『あらら』といって、悪びれた感じはしない。呆気にと取られてる。

ということはやっぱりこの人の想い人って……。

「あの女の人があなたの恋人？」

侯爵様明らかにおじさんだし、「三十路は若い子が好物なんだ」「人生色んな恋愛がある」って師匠の友達がいつてた。嘘か本当かわかんないけど。

「……………ごめんねえ。天然でおバカさんでこんなときに変なこというダメダメさんを相手にしてる余裕が今ないの……」

……………素直に「そんなわけねえだろ馬鹿が」って言うてくれていいのに……………

じゃあ相手は侯爵様かあ。……………おじさん趣味？

いやでもこの人は魔法具で三十路から幼女になってんだから、侯爵様も変化してる可能性があるか。

さっき言ってたけど、確かに蛇なら種類によっては尻尾にさすだけで死ぬことはないのかもしれない。

……………刺しまくっていいわけではないだろうけど。

「……………もう、いいわ……………」

「…………え…………」

「あなたは昔からそうね……。私に優しくしてくれるのに私がそれに力強く答えようとするといつも逃げるんだわ……。だからもうやめるわ…………」

…その原因は力強くが強すぎるせいです。

『ビーフ』ちゃんはやっとしよげてる。ちよっと可哀相。ヤンデレは危ないけど愛の塊だからね。

…………でも前から見る勇氣は私にはまだない。

…………あなたは、これしきで諦めるんですか？

私は師匠についてきますよ。たとえあの人嫌がっても。私を売っても。私に危害を加えても。

どちらにしても私は一人ぼっちなんだから、あの人についていくんです。

『謎のビーフ』ちゃん。

あなたはそれだけで恋を諦めるんですか。何年かかったのかは知らないけどここまでできてやめるんですか。

ここまできたのにあなたはそれを捨てて今の想い以上の恋愛がこれ

からの未来にできるんですか!?

女は根性ですよ!？私も根性で師匠から生き抜いてきたんですから！それに一度恋したのなら、それが長ければ長いのなら途中で投げ出すのは大損です!!

……………そう、言えればいいんだけど今の私は完璧に部外者。
私が口だしすることじゃない。

これは本人が気付かないといけないことだからすっごくすっごく歯がゆい!。

「……………なにも、そうは、言っていないだろうが…」

「……………?」

「確かに逃げてることは認めるが……………その、き、嫌いとは言っていないだろうが!……………こ、これからも追いつけるがいいさ!た、ただし、危なくないやり方で、だ!」

よく言った侯爵様ーっ!

あなたが言わないと意味がなかったんです!偉いっ!
しかも微妙にツンデレっぽいですね!

「おー、侯爵様がついに言った」

女医さんも喜んでるよ。

「あ、一応言つときますけど浮気中じゃありませんからね。そこらへん誤解せずに。私十二歳以上の男は範囲外ですから」

……後半は、聞かなかったことにしよう。

(1)・12 終わりよければ全て、……………良くない！

さてさて『謎のビーフちゃん』。侯爵様の告白に反応は……………。

「……………いいの？」

「…え……………」

「嬉しいわあ……………あなたがそう思っていてくれてたなんて…。しかも私が宣言したあとになんてね……………」

「…お前、俺を諦めるような宣言を……………」

「私はただいつものやり方をやめようという意志表示をしようとしただけよお？ちなみに詳しくいえば本当はあのあと「だったら強行手段として『布団の上』で言いなりにさせるだけだわ」と言おうとしたのだけれど。ふふ……………私がこれしきのことであなを諦めるとでも思っていたのですか？」

そんなわきやありませんよね

それにしても嬉しいような悲しいような。

「あなたから本心を聞けて私すごくうれしいわ！…では、さっそく……………」

「ちちちちちちょっと待て！！」

「何を恥ずかしがっているの？ふふ……これからは恥ずかしいという感情さえ忘れさせてあげる……」

完全にやばいほうにイッてますね。

でも助けないのは、あるいみハッピーエンドな展開だし、私も命は惜しいし。

「はっ、恥ずかしいわけでは……」

「ああ、ここじゃだめね。人が多すぎるし、………もう危険だねえ」

？最後の一体どういう意味だろうか。

「とにかく行きましようか、………あ・な・た！きやゝゝ！」

照れながらも蛇姿の侯爵様の尻尾を、握力どのくらいですか？つてぐらいにかなりにぎりしめる小さな少女。

もう片方の手で黒の剣を引きずってるんだから、一見何ものかわからないですから。

でもどうやら帰るみたい。

「『ビーフちゃん』」

「……それで呼ぶなと言ったはずよあ？あなたは、天然なのかしらあ……？わざとなのかしらねえ……？」

そうは言ってるのに剣を向けようとはしないのは、たぶんそれほど怒ってはいないのかも。

今はハッピーエンドタイムだしね。

「じゃあ、私達はもう行くわねえ……………愛の巣へっ！」

ちなみにさつきから侯爵様が静かなのはあまりに強く尻尾を掴んだために失心中。

掴みすぎです！愛の巣に着くまでに天国に着いちゃいますよ！

と、いう忠告も言えずに部屋の大きな窓から飛び降りていった。

今出るときに侯爵様が窓枠におもいきりガンガンぶつかってましたけど本当に愛してるんですよね？

窓からじゃなく入って来たときみたいに玄関からであればいいのに。

というか夜中なのに今家に帰るんですか？

それにここ三階なんですけど。

着地できるであろうあなたはともかく侯爵様はどんどん危なくなってますよきつと！

疑問府だらけだっ！

「あ、言い忘れてたけど」

ぎゃあ！いきなり窓から現れないでください！

狼の私でもぎりぎりなのに、どういう身体能力してるんですか！？
普通の蛙はそこまで飛びませんから！

「あなたも早く逃げたほうがいいわよ。他の子達はもう屋敷の外に逃げてるからあ。……ではねえ」

あれ？そういえば女医さんがいなくなってる。
さっきまでせわしく聞こえてた他の蛇の声や音もないし。

……バチリッ

「……」

「……」

振り返ろうとも振り返れないのは私の頭を締め付ける後ろの手のせい。
い。

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……… 焼き、加減………は………？」

「…………… 考えてるとおりだ」

その夜雲一つない空に、突如自然発生した雲。そこからその年1番の大きな落雷が降りました。

結局私はお風呂に入れないまま、またしばらく旅をしなければならなくなつた。

(2)・1 バーと館の騒がしい三人集(前書き)

さりげなく(?) 人物紹介

(2)・1 バーと館の騒がしい三人集

――あるバーでの三人集

「おい、聞いたか。あのギルバート殿が港付近に来るらしいぞ」

「あの最強最悪の暗黒魔法士がか!？」

「あれは敵ならば最悪すぎるが味方にすれば最強だからね」

「料金も最強最悪だな」

「ともかくこちらに引き寄せる作戦を立てなければ」

「そこでここにわかるかぎりで彼のプロフィールを書いてみた」

「本当か!？」

「貴様つ、俺らに黙って勝手にやっていたな!？」

「じゃあ見ないの？」

「馬鹿か貴様は」

ギルバート（苗字・年齢・種別共に不詳） 『変化タイプ』

通称「最強最悪の最低暗黒魔法士」

長身で青みがかかった黒の髪に鋭い目が特徴。

彼の名を貴族の間で知らぬ者は少なく、誰もがギルバートに様々な依頼をする。

ギルバートは誰かの下につくのも縛られるのも嫌うが、仕事の場合は別で依頼料は絶対に高額。

だが多額であればあるほど、綺麗に仕事をこなす。

口数が少なく冷淡で容赦ないが魔法に関しては若くして凄腕で敏腕。さらに見た目もクールでカッコイイということでの婦人、淑女からも人気。

起きてるときも寝てるときも常に隙をみせず、奇襲にあつた際には自身が強いにも関わらず供の少女を犠牲にする。

少女を疎んでいる節はあるが、詳細はやはり不明。

出身地、親、生い立ちも不明。

「まさに3S（最強・最低・最悪）だな」

「不明不詳ばかりではないか。しかも知ってる情報ばかりでまるで

役に立たんな」

「当たり前じゃないか。僕が出来ることなんてたかがしれてる」

「さらに役立たずだな」

「…………じゃあこの情報もいらない、と」

「何だよそれ？」

「どうせまたくだらぬ」「あの少女についてまとめたものなんだけど」「早く見せぬかっ！」

「……」

「貸しだよ？」

リップ（拾い子のため苗字はなし）、14歳、種別は狼 『混ぜりタイプ』

常に敬語で喋り、ギルバートとは反対に真っ白に長い髪に犬耳、犬の尾が特徴。

狼の獣人は今や少なく貴重である

狼特有の耳と鼻が自慢らしいがまだまだ経験不足。

彼女自身は一人でいるとただの狼娘だが、ギルバートのそばでよく

よく目撃されているため、

ある男は「あの娘には何か秘密があるんじゃないか？」

ある娘は「あの犬を私のペットにしたいわ」

ある老人は「ギルバート殿の教え子に違いない。将来きつと有望になるだろう！」

ある婦人は「ギルバート様のおそばをうるちよると！なんて卑しい犬なの！？」などなど

ギルバートのついではいえ、本人の知らぬ間にひそかに様々な注目をあびているのだった。

強情な性格で誰かしらが捕らえても何をしてもいつの間にかギルバートの傍にいる。

生まれ、生い立ち、離れない理由、全て不明。

「拾い子と注目については新事実だがやっぱ不明だらけだな」

「知っても意味がない情報ばかりではではないかつ！！」

「わかるかぎりって最初に言っただじゃないか」

「そういう問題ではないっ！だいたい何だここの文は！なぜあやつが注目など浴びねばなんのだった！！最低魔法士でも見ていれば良からうがーっ！！」

「いや、それを僕に言われても」

「ともかくあいつはほっというて作戦をたてるぞ」

「そうだね」

「うがーっ！……しめてくるっ！……！」

ガシャーーンッ！

パリンッ！

ぎゃー！

お客様あー！

「…………嫉妬は、怖いね」

「お前の記載のせいだろ。お前がこの店弁償しろよ」

「仕方ないなあ……………」

――ある館での三人組

「リイちゃんとギル様にお会いになったとは本当なのですか、『フロッグ』おばさまっ!？」

「あらあらあ、ビューティフルが抜けてるわよあ?いくら今の私の姿は十代後半とはいえ、一応あなたの叔母でもあるのだから少しくらいはねえ……」

「わかりました、若かりし頃の『ビューティフルフロッグ』おばさま」

「……………何だかあの子にそっくりねえ……」

「リイちゃんのですの!?!?そんな、そんな、嬉しいことが……!きやあ〜んっ!?!」

「褒めてないわよあ?……………聞いてないわね」

「聞いておりますわ!だってリイちゃんてばすっごくかわいらしいんですのよ!それにすっごく天然で強くて凛々しくて素っ気なくて冷めてて、でもそこが堪らなく愛おしくて愛おしくて!?!」

「…物好きよねえ。いつからそんな子になったのかしらあ?」

「今、わたくしのような子供の目の前で男性を拘束しているおばさまに言われちゃったあ!」

「…だってこの人だったらこの前、私になら襲われてもいい、って言ったのになんてか逃げ出そうとするんだもの。悪事を働く前に私を口説いてほしいわ…」

「それならば早く結婚なさればよろしいんじゃないですか？」

「それが……この人ったら照れ屋さんでえ！素敵に告白されるのはいつだって女の子の夢でしょう？なのにいつまでもプロポーズしてくれないのよ…」

「毎回こんな状況にされるのに言えるかつ！！それに照れてなどいないっ！」

「じゃあ今この場で言って？」

「えっ」

「私のこと、本当に好きなら今この場でいって……」

「……あ……の……き、嫌い、ではない！むしろ、あ……、いや……、い、今、は……」

「……早くプロポーズプロポーズプロポーズプロポーズプロポーズプロポーズあと少して結婚結婚結婚けっこ」

ガシャンッ！ガチャガチャガキンッ！

「…拘束が増えましたわ。さて、おばさまが狂気にはいったことで
すしお邪魔虫は退散致しますわ！わたくしも早くリイちゃんたちを
追いかけなきゃいけませんもの！！ではまたご会い致しましょう、
……………そう遠くない未来の私のおじさま？」

「ま、待て、この危ない状況で、なぜ、」

「あらあ…話をそらすだけでなく私以外の女性を見るのねえ…………？」

「待て！ルチアーナ嬢っ！私を一人に」「ああ、きつとリイちゃん
は前回よりももっともつとより素敵な人になってるのね…！早く会
いたいっ！！！」

「大丈夫……………すぐに私だけみえるようにしてあげるからあ……………！」

「誰かまともに話を聞けるものはいないのかあっ！！？」

無情にも扉は静かに閉まって行つた。

(2)・1 バーと館の騒がしい三人集(後書き)

『ビーフちゃん』がヤンデレなら、侯爵様はツンデレですね(笑)

(2)・2 蛙の子は蛙、ストーカーの姪はストーカー(前書き)

予定より投稿が遅くなってしまいました(汗

(2)・2 蛙の子は蛙、ストーカーの姪はストーカー

「というわけでリィちゃん達をばびゅんと追いかけて来たの〜!」

「……何がどういうわけなんですか？」

ビッグニュース。

朝目覚めたら隣でルチアさんが添い寝してました。

昨夜、久しぶりに普通の宿屋で寝た師匠。

この前の『蛇と蛙の雷事件』（思い出したくもない!）で、無情にも夜の寒空のしたに気絶した私を置いていったあの人に追い付いたのも昨夜。

私は未熟な自作の魔法具で室内に侵入すると、私の鞆から毛布を取り出して床に横になった。

師匠の部屋は当然シングルなので私の入る布団などないし、部屋をとるにもお金があまりない私は自前で払わないといけない。

そんなん無理だつ!と、叫べるほどに私には現在所持金が無さすぎる。さらにいえば師匠の布団に近づきすぎると、気配に気付いた師匠が雷撃ってくるから迂闊に近づけないので少し離れて固い床で眠ることにする。

ちなみに私の荷物は師匠のお友達という人から餞別でもらった『厄よけのリング』をいつも入れてて、さらに師匠の道具が入っているあの亜空間みたいな魔法具ほどではないが、またまた自作の魔法具の中に収納はかなり少ないけど私はいれている。だから私の荷物も無事だった。

……そして朝目覚めると隣にお姫様みたいな金髪美少女がいました。

……私、この人苦手です。

「だあってえ、リイちゃんを目撃情報とリイちゃんの匂いとリイちゃんの足跡とリイちゃんの行動予測に時間がかかったちゃって、追いついたのが夜になっちゃったの……」

ストーカー行為にしか聞こえませんかよ、変態お嬢さん。

「で、こっそり入ってみればリイちゃんが無防備にもかわいらしく寝ているんだもの！チャンスと思ってっ」

「何のチャンスですか！」

こわっ！！私知らぬ間に襲われかけてたの！？

「あ、大丈夫！わたくしがやったのは抱きしめてほっぺにチューだけだから。そのために途中でリイちゃんが起きないように嗅がせちゃったあっ！ごめんねっ」

悪くも思っていないのに謝るなあーっ！
どうりで私が気付かないわけだよっ！

全然大丈夫じゃない！

私が気付く前に薬を嗅がせ、より深い眠りに入った隙に寄り添って寝る……。

……その行動力に先日あの人を思い出すなあ……。

でもさすがは蝶々。そのたんだ羽は伊達じゃない。

だけどそれでも犬、いや狼の私が背後をあかすなんて、私はまだまだ未熟すぎる……。

「それにしてもリイちゃん起きるのが早いねえ。薬の量が少なかつたのかしらあ……？ ああ、でも……無防備のリイちゃんも可愛かつたあ……。我慢するのが大変だったわあ……。普段は私に怒ってたり呆れてたり冷めてたりするのに、あ、そんないつものリイちゃんもわたくしは大好きよっ！ で、そんなリイちゃんにわたくしが触ってもチューしてもあどけない寝顔でえ！……もう、たまらなかつたあ……っ！……あつ、失礼、よだれが……」

……。

……誰かあ……この変態美少女お嬢様をなんとかしてえ……！

だが、早朝の部屋に未だに寝てる師匠を除いて、他の誰かがいるはずもない。

というか師匠に助けを求めるなんて馬鹿以外の何者でもない。

「？リイちゃんどこ行くの？」

「……寝直したら危険な目にあいそうですし、かといってこんな朝早くにどこの店も開いてないと思うので、ちょっと歩いてこようかと」

誰かさんのおかげで頭も痛くなってきたしね。

「えっ、つつつつまり、これ、これって、デートのお誘いっ！？も、もちろん私は今からでも全然OKのノープロBLEMよっ！！リイチやんたら急なんだから、もう……………！」

「だからどうしてそうなるんですかっ！？」

(2)・3 あなたがアタリなら世界の果てまで逃げてやる

結局ついてきちゃってるし。

何でこの人といい『あの人』といい私にかまうの？

…そんなに嫌じゃないのがちよっぴりくやしいけど。

だっしょうがないじゃないですか。

師匠には悪友というか親友というか仕事仲間というか宿敵みたいな人が沢山いるみたいだけど、凡人に等しく世界を転々と旅する私に友達なんて出来るわけがないじゃないですか。

旅をしながらの、出来た友達…。

……嫌じゃ、ない。でもやっぱりこの人は苦手…。

今だって幸せそうに腕に絡んでくるルチアさんは引き離そうとしてもガムみたいに離れない。

なんでそこまで引っ付くの？

今が朝で本当によかった！

……昼間にこうして歩いたら、明らかに「アレ」な人に見えるだろうから。

というかルチアさんの目からでるハートのオーラが痛い…。

そもそも散歩はこの人から離れるための口実だったんだからこの人が着いて来たのじゃ意味がないじゃないか。

早めに散歩を終わらせて早めに宿に戻って休んじゃおう…。

……？ん？あれは、なんだろう？でも見た目から怪しさぶんぶんだから相手にしなくていいか。

「あ、リイちゃん！あんな所で福引やってるわよ！しかもタダです

って！」

えっ！あからさまに怪しいのに何でつつこんで行くんですか？
あえて私も口にださなかったのに。

普通朝っぱらから無料で福引はやらないし、体全体が黒マントで覆われている人なんて信用できるわけがない。

それに賞品の内容がどこにもないのも怪しい。

書かれてもいないし、ただそこには福引の看板とあのガラガラ回すやつと怪しい奴だけ。

しかもその黒ずくめの人は、早朝にたまたま散歩で通り掛かってしかもやりたがっている獣人をガン無視でこっちつまり私達をじい…
つとガン見してるから誰が見たって100%怪し過ぎる。

というかこっちみんなっ！

ほら！あからさまなスルーにその人怒って帰っちゃったよ！

これで周囲には完璧に人はいなくなっただから、私はますます行きたくない。

私も無視したいよ？

…でもね、こちらには、空気ヨメーッ！、な暴走お嬢がいるんですよ

「お願いします」

ほらやっぱりね、このありきたりちようちよっ！
なんでやっかいごとをわざわざ作るんですか！

「えっ……あ、はいっ」

意外にも彼（声的にそうだと思う）が顔を隠していても面食らっていることはさすがの私にもわかった。

「……………本当に来るとは……」

……………あなた自身もまさかその恰好で寄って来るとはまったく思っ
てなかったんですね。
どうぞあなたの提案者を思う存分、恨んで、そして感謝してください。

私はこの人を恨み、そして呆れますから。

私達が狙いというところから怪しさがMAXになったのに、この人は未だに現状に気付いてすらいない。

……………はっ！まさかこの人、本当はこの不審者の狙いの核をとくに見抜いて私を守ろうと……………。

「……………これでアタリを引けばリイちゃんともつとらぶらぶになれるはず……………！いや、それよりもアタリならあの『邪魔魔虫』が抹殺されるのと思えば……………でもこれでもしハズレを引けば『あれ』はこれからリイちゃんに付き纏い続けてわたくし達の仲の邪魔をしてくることに……………っ！そんな、そんなおぞましいこと……………！！」

おもいつきり私情が挟んでました。

『お邪魔虫』とか『あれ』って、ルチアさんは師匠を尊敬してるはずだからありえないから………もしかして『あの人』のこと？ いや、でもルチアさんは会ったことがないはずだし…まさかね。

「蝶の虫人、ルチアーナ！狼の獣人、リイちゃんとの甘い毎日のためにこの愛の試練、乗り越えさせていただきますわっ…！」

一言余計です。

というかタダなだけにただの福引ですから、当人を放って主旨変えないで。

「そ、そんな………わたくしの愛が、負ける、なん、…て………。
『アレ』も、生き続ける、なんて………っ」

地面に向かってうなだれるルチアさんの尋常じゃないほどのこの落ち込みよう。

いつそ哀れにさえみえる。

でも私はこれを慰めるつもりはないし、慰めたって図に乗っていつ

そう絡んでくるだけだし。

というかむしろこれでアタリだったら私はそれを呪ってやる。

だってアタルなんてことになったら絶対に「わたくしとリイちゃん
は共にいる運命にあるのね!!」とか「あの『馬鹿』は…抹殺の運
命になる……これで邪魔ものはいないわ……!!」とか言っ
てかなり鬱陶しいことになるに決まってるから。

結果だけいえばルチアさんは嬉しくも『ハズレ』を引いてくれた。
まあこういうものって滅多に当たらないんだし、回すときのワクワク
感が醍醐味なんだから、はずれてもそれだけで楽しめるとい
うものだ。

「…………でも……でも、リイちゃんがアタリを引いてくれるはずだ
わ!!そうすれば、そうすれば、きっと…………!!」

しつこいな!!なんでそうなる!!

ポジティブすぎませんか!?

私がやったってラブラブなんかにならないし『あの人』もくたばっ
たりしませんからっ!

というかやるつもりないし!

「やりませんからっ!私はさっさと帰ってご飯食べて二度寝したい
んです!」

ルチアさんは置いていってしまおう。

どうせ後で勝手にくっついてくるに決まってる。

「…………リ・イ・ちゃん……」

…なんか急に背中がすごく重くなった。

不審に思って振り返つてみれば肩のところにルチアさんがへばりついでた。

邪魔だから落とそうとしたんだけど離れない離れないこと！

ルチアさんは軽く宙に飛んでいるから肩に重点的に乗っかけてくる。

「…これは、これはとても大事なことなの…！リ・イちゃん………
…？」

キモい！キモいよー！！なんか首元ではあはあしてる…！

ぎゃあ！ペロつと舐められたあ…！

な、なんで、どうして、そうまでして私にやらせたいの…？

…………私は、弱いのだろうか？

何にとは言わない。

(2)・3 あなたがアタリなら世界の果てまで逃げてやる(後書き)

そういえば「変態」って辞書で引くと「さなぎから蝶になる」って意味でもあるらしいですね

(2)・4 私は花でもないし蜜なんて持ってませんよ

「一等〱二人ペアでのラムズリル島一週間の旅〱」

嘘つけっ！さつきルチアさんがだしたのと同じ色じゃないか！

「きゃあ！やっぱりリイチちゃんすごいわ！」

あなたものせられないの！

そしていい加減私からおりろっ！

まったく、もう。

「……………これ、あげます」

「えっ…！！？な、なななんでなんで！？ラムズリル島よ？魔法で南国で歴史溢れる夢の自由な国よ！？庶民には行くことは難しいのになんで棒にふるの！？」

「だって師匠は興味なさそうだし、もったいないから使ってあげてください」

チケットという名の紙切れ一枚とはいえ、使わないものを持つてもしかたないし、そんなにすごいのなら捨てるのも勿体ない。だからといって私は使わないけど。

「えっ！捨てちゃうんですか！？使ってくださいよ！！」

やっぱり何か企んでいたか、くじ屋。さりげなく会話に混ざってきたな。

あいにくだけど私は使いませんので無視無視。

「ルチアさん、受け取ってください。……私からの、あなたへの思いと一緒に……。それとも、貰って欲しくないんですか…？」

…一応言つときますけど、演技です。
ある意味、嘘はついてません。

私の今の思いは「こんな怪しいものは鬱陶しいこの人に押し付けちゃうに限る」しかない。

そしてルチアさんはあっさりと個人的に気持ち悪い私の演技にはまってくれた。

「そ、そんな……、わたくしの、わたくしの大馬鹿者お！！リイちゃんの想いに気付いてなかったなんて！！リイちゃんのそんな氣遣いに気付いてなかったなんて！！わたくしはなんてばかなの！！このゴミ虫、バカ虫っ！！…ああ、それにしてもリイちゃんが可愛すぎますのー！！」

……真つ正面からおもいつきり抱き着かれたけど、毎度のことなのでなれてしまった自分がすごく嫌あ。

でもいつもと違うのは、……よほど嬉しい言葉だったのか背中の羽が忙しいほどに羽ばたいている。

いちいち引つ付かないでっ！！

本当ならそう言ってしまいたい。

……でも、うるさいけどさらなる厄介事回避のためにも、我慢しなければ。

このチケットさえ受け取ってくれば別にいいから。

「嬉しい！すごく嬉しい！幸せなの！！……だけどねえ、リイちゃん。庶民には高級チケットだとしても、何回でも行ける無料パスを持つてるわたくしにはただの紙くずどうぜ」「暑苦しいので離れてください」

やだやだあー！、と言って離れないルチアさんを力ずくで強引に引きはがすのには疲れた。

……この人が私の数少ない中の友達じゃなかったらぶん殴ってるか魔法具ぶつけてるところだ。

そうなのだった。この人かなりのセレブだった。なにせお嬢様だし。こんな変わった人の家族ってどんな人なんだろうか。

「くすん……。そ、それにね、チケットに書いてある日付なんだけどね……」

「日付？」

チケットをよくよく見てみればラムズリル島行きの船は今日から一週間後に出航らしい。

港は明日出発すれば着くくらいの距離。

「その日はちょうどおばさまの婚約記念日でわたくしも強制的にパーティーに参加しなくちゃ行けないから、そのチケットは使えないの……」

ナイスッ！おばさまっ！

叔母なのに結婚記念日でなくて婚約記念日という疑問がつかんだけど、まあいいか。

「そうですか。使えないのは勿体ないですが仕方ないですね」

でもこれでルチアさんが数日中に離れてくれることがわかっただけでも良ししよう。

「……だから、だから、嫌いにならないで……」

「……………はい？」

…なんでそうなるの？

ルチアさんがパーティーに行くのと私が嫌いになるのの結び付きが私にはわからない。

悲観的になることでもないような…。

「リイちゃんの役にたてなくてごめんね。でも、絶対参加だから…。
…。その、本当は、リイちゃんの役に立ちたいのよ！？使ってあげたいんだけど…」

…なるほど。つまりルチアさん的には、

リイちゃんはチケットを消費したい ルチアさんに頼もう でも無理だった この女は使えない 役立たず〓嫌われる〓自分から離れてく。

…たぶんこういう推理であっているとは思っ。

あー……………、…こういう場合はどう反応すればいいんですか？

友達なんて少ないし、ルチアさん見たいな人はどう対処すればいいのかかわかんない。

ルチアさんはいつも本音モロだしだから、思ったことを正直に話せばいいんだろうか。

「……………嫌いになれるわけがないじゃないですか」

「え……………ほ、本当！……………に…？」

ルチアさんが珍しく私の顔色を窺っている。

それほどまでに私に嫌われるのが恐ろしいのだろうか。

お嬢さまなんだからお友達なんて沢山いるのだろうに、なぜ私に？

「私には今まで友達がいなかったから、この気持ちをどう言えばいいのかよくわからないんですけど……」

ルチアさんはかなり奇天烈で変わり者でちょっと不審人物だけど、それでも女の子なのには変わりはない。

慰め方がよくわからないから、とりあえず私の思っていることを正直に言ってあげるとしよう。

「ルチアさんは私の大事なお友達であり、…一応は…大切な人なんですから」

(2)・5 晴れのち雷、雷のち……重石

「ふんふつふふ〜ん えっへ〜ん……リ・イ・ちゃああん」

ルチアさんは私の心からの一言を伝えると同時に再びタツクルもどきのハグと、嬉しいのか何かが恐ろしいのか何だかよくわからない発狂をしてきた。

そして今ではこのとおり。

突き放すのもなんだし、とりあえず腕組みだけは許している状態。

ただし、恋人繋ぎだけは断固反対させていただきました。

「…結局、チケットはどうしよう」

滅多に行けないのに捨てるのはあまりに勿体ない気もするんだけど…。

「それなんだけど……一応ギル様に聞くだけ聞いてみたらどうかしら。絶対拒否の可能性もないかもしれないし…」

……頭つから否定しないほうがいい、か。
確かに師匠に聞くだけ聞いてみればいいか。
処理はそのあとで考えよう。

……さてと、

「手をなめたりお尻触ったりしたら本気で殴りますよ」

怪しい動きをし始めたルチアさんは涙目になりながら私の腕から離れていった。

触れないなら離れていた方がまだまし、ということだろうか。

どんだけ私に触りたいんですか貴女は。

驚いたことが起こった。

驚きすぎて私は数十秒固まりましたとも。

というか何が起こったのかすぐにはわかんなかったのだ。

「……………」

話すよりも先に見せた方が早いと思ってラムズリル島行きの手ケットを師匠に向けたら、師匠は手ケットの文に目を走らせるとごく自然にかなりスムーズに流れるように……………私から手ケットを持って行った。

……………え？……………あ、…あ、れ？師匠、どゆこと？

師匠は絶対に受け取らないと思ってた。百パーセント無視すると思ってたのに。

手にしたってことは……………それを望んでる？欲しいんですか、それが？行きたいんですか、ラムズリル島に？
師匠の場合、お金に困ってないから楽に行けるはずなのに私から手ケットを盗ったってことは……………。

「……………そこまでがめついなんて……………」

ビシャーーンッッ

「……………」

「~~~~ッッ！~!」

ががが顔面が、顔面がぁーっ！！

聞かれてはいけないとこだけ声に出してしまったぁっ！！

あまりの痛さに声がでないまま部屋を超スピードでごろごろ縦横無人に転がる私をうざく感じたのか、師匠は私をボールのごとく足蹴にして押さえ付けた上にさらに魔法具で重しを乗せてきた。

大きく真っ黒で明らかに頑丈そうな石のせいで背中痛いし、顔は痛いし、痛みで暴れることも出来やしない！

「ふげえっ！」

それだけじゃまだ足りないのかさらに師匠はその上に座るというドS魔による大胆鬼畜で悪質な罰を！！

他の人が見たらどう説明するつもりなんですかぁっ！一歩間違えれば殺人未遂ですよっ！？

痛い上にもがくこともできないこの苦しみを師匠に分けてあげたい。でも今の私にはそう思うことすら煩わしい。何てったって顔面に雷を直でくらったから。

…………でも、何故か師匠はいつも本気でやらないな。

今だってかなり熱くて痛いけど痕に残るほどじゃない。…………しばらくくやけど状態だけど。

「まあ、大変！リイちゃんっ！！」

この人はこの人で心配してくれているのかと思えば、どさくさに紛れて私の耳や髪にチューしてくるし…。

だぁぁーっ!!もうっ!!

全てに置いて鬱陶しい人だ!!

「……くっ……し、ししょう!チケット、なんか、なくても、師匠、は……大丈夫、……じゃ……」

「……海に群れが出たらしい」

「……………」

意味がわからないし答えになっていしそもそも海は群れなんて作らないし言葉になってないし。

でも、答えてくれたのには少なからず驚きだ。

「むれ……群れ?ギル様、それって先日イワシの方々によって行われたお祭りの、あの事故のことですか?」

「……………」

相変わらず師匠は全く喋らないし顔も変わんないけど、長年一緒にいる私にはそれが肯定による沈黙だということはすぐにわかった。そして場の空気にルチアさんもそれに気付いたんだと思う。

イワシのお祭り、というんだから、たぶんそのイワシは魚人のことなんだろうけど…。

珍しく私の質問に答えてくれた師匠だけど、さらに聞いてもどうせ無視か要領を得ない答えが飛んでくるに決まってるからルチアさんに聞いてみるとするか。

でもその前に、質問に答えず話の途中なのに石の上で本を読み上げたフリーダムな男と、心配顔をしながらまたしても人の尻尾にほお擦りをする天然無自覚腹黒な少女の、二人を何とかしなければならぬというくたびれるような作業が私には残っていた。

もちろんその片方には今度こそ体罰を加えさせてもらおうとする。

(2)・6 男たちのひんやり暑苦しいお祭り事件

「……………本当に本当になんであなたは私にそう触りたがるんですか」

なんとか重石地獄から抜けられた私はすぐさま彼女をお説教師匠に言ったら後が恐ろしいしねっ！

…どんなに私が怒っても殴っても怒鳴っても、この人は毎回毎回同じことを繰り返す。

女の子同士なのに色んなところ触って何が楽しいんだろう？

「ううゝ……。だってだって！いつもいつも一応は触らないように自制はしてますのよ！？でも……………リイちゃんのところけるような声にちよっぴり冷めたその目つき。身体がぞくぞくしすぎておかしくなりそうでえ…！絹みたいな髪やふさふさの尻尾、……………わたくしを狂わすような匂いに柔らかく甘い肌と唇う…！何よりもわたくしへの素敵な愛のお言葉イタアイツ！！」

「あたかも私とキスしたみたいに言うなそして愛の言葉など発したことなどないし断じてありえない」

それから嬉しそうに痛がるな。
だんだん苛々してきた。いつものことだけど。

「リイちゃんがわたしをこんなにまでしたのに……」

「そんな記憶はどこにもないっ！ どうでもいいからさっさと私の質問に答えてっ！！」

「くすん……。イワシのお祭りというのは変化タイプのオスのイワシによる大規模な……。暑苦しい？ お祭りですの。内容は興味ないので詳しくないのだけれど……ひたすら同じ所を暑苦しく？ ぐるぐる回るだけの意味がわからないお祭りみたいで……。彼らにもその行事の意味が理解できてないみたいなのだけれど……」

じゃあ何のためにやるのだろうか？

「それで事件なんですけど……。回るといってもそんなにすごいほどではなく、一分でようやく一周というほどの遅さと範囲なので渦が出来ないから漁師達も困らなかつただけ……」

「今回は違ったと？」

事故があつたつて言つてたしね。

「…イワシの一匹が目ざとく魚人ではなくただの違う種類だけどころく美人な魚を見つけてしまつて、…男達を取り合いになるわ、興奮して祭は最高潮になりすぎるは、イワシを食べに来た大きな魚達が右往左往するはで…止められる魚や人はいなかったの」

…その光景なんだかすごく見たくないなあ。
しかも争う理由がすごくどうでもいい。

「その結果海に渦が出来てしまつたみたいで…。それが今も続いて船を出すのは危険だし、安全地帯では漁の真つ最中だしで今は一日に数回しか船は出してないらしく…」

どこまでも熱くなる単純なイワシの魚人だこと。
そんなことで被害被る我々はどうなるんですか。

「…というか当の本人、いや、本魚は一体何してんですか!？」

「えっ？だつて何の変哲もないただの魚ですよ、リイちゃん？しかも一匹だけで放浪してるんだもの。食べられちゃってるに決まってるじゃない」

……………。

だめだめだめだめ！今のなーし！！
さっきまでしてた会話は全部なーしっ！
そんなくだらない話は聞かなかったことにする！

「……………と・に・か・く！師匠はその島に行きたかつたんですか？」

「……………」

はい無視。まあ想定済みだけど。
でも、師匠が行くということとはつまり私もそこに行くということになる。

二人組だから私もきつと乗れるはず！

「……………う、うう……………ず、ずるうーい！！わたくしも行きたーい！
！リイちゃんとギル様と一緒にエンジョイしたーい！！リイちゃん

と一緒のフトンで寝泊まりしたいー!!」

「やったっ! この調子だとすぐにでもお別れできそうだ!。
後で旅仕度……といっても私の荷物は魔法具の中だからすることは
ないか。」

「………… お前を連れていく予定など、ない」

「…私は少し前から黙ったままなんですけど。
どうやら師匠は私の心が読めるみたいだ。
いいじゃないですか、どうせ一枚で二人組なんだし。」

「いいもんいいもん! 勝手についていくから!」

「…行けないんじゃないんですか?」

「ふふ……リイちゃん、わたくしのねばっちこさをなめちゃいけないわ! そしてわたし自身を舐めてもいいのよ!」

「誇れるところじゃないです、そこ。」

そしてどうしてそういうことを平気で言えるんだろう？

とにかく、私たちは明日にでも出発することになった。

…でもあくまでもこれは私の予定。

師匠はもしかしたら今日私を置いて出発するかもしれない。

多分今予定を聞いても無視されるのがオチだろうし。

だとすれば私は何がなんでも出航日までには追い付かなくてはならない。

…まあルチアさんとはお別れだし、それくらいの苦難は別にいつか友達なのに悲しみの別れが生まれないなんて何てことだろうか。

「あの……いつものご褒美、い、いい……？」

……言い忘れてましたけど、ルチアさんは働かせるにはとっても有能な人。

その一、貴族だからお偉い人達の裏情報にはとっても詳しい。貴族

を懲らしめるときとかに有益な情報を与えてくれる。

その二、お金持ちだからたまに色んな経費を持つてくれる。更には、お金持ちの美少女だから相手側から勝手に安くしてくれることもある。

その三、なぜか私に従順なこと。そのため、私がたった一言優しく（たまにわざと甘えて）お願いするだけでかなり張り切って働いてくれるから安上がり。

その四、結構ありえないくらいの体力がある。だって馬に乗っても往復で五日はかかる距離をたった二日で帰ってくるのは明らかにおかしいだろう。一度聞いてみたら「愛の力と親戚による特訓のおかげですわぁっ！」と返された。…親戚？……特訓？…愛の力もそうだけどこの人の言ってる意味がよくわからない。

その五、彼女は虫人の蝶。つまり、体重が軽いどころかほぼ無音で飛べるため、高いところの持ち運びや隠密にかなり便利。

――以上のことから私にとってルチアさんは役立つどころか、かなりお世話になっている。

だから、毎回お礼をしてるんだけど……。

「…本当に、これが、友達にする、一般的な、お礼の仕方なんですか…？」

「うん！リイちゃんは世間知らずだけど、これは常識のことですよ！あ、ただし近い人にだけに！年上の人や年下の人には絶対に絶対に絶対にダメっ！！」

うわっ！…何もそこまで強く言わなくてもわかってますから。

ただ、……こんなことをする人を私は一度も見たことがないんですけど？

頼み事をするのはたいていルチアさんだし、他の友達はみんな一つか二つ歳が違うし。

私が人間関係に疎いからって自分の都合のいいように騙してるだけなんじゃ…。

でもそれは私の友達がかなり少ないから見ないだけで、街中でも私が見逃してるだけなのだろうか…？

本当はみんなやってること？

「さあ！早く早く早く早く早くはや」わかりましたから少し黙れ」

そして私はルチアさんの頬に自分の唇を軽くつけたあとに一言。

「ありがとうございます」

今度は本当に心をこめて言ってあげた。

…そして、ルチアさんは本気で鼻血をだして倒れました。
まあいつものことだけど。

…と、思っていたら、いきなり飛び付いてきた。

不覚っ！ルチアさん相手に油断しすぎた！

とっさの行動が出来ず、私にしては不覚だった。

さらには私の胸やお腹に飛び付いてきて自分の綺麗な顔をすりすり
ときたもんだ。

このままだと鼻血の後が服に染み付く！……もう、遅いかもしれない…。

「それはなしっ！！」

でも私としては身体を引き離すだけだった。

なのに、びっくりしたのと焦ったのとでうつかりルチアさんのお腹に膝蹴りしてしまった。

ドフツ、と低く硬い音がする。

「ッー！ル、ルチアさんっ！ごめんなさい！つい……！」

ルチアさんがかなり頑丈だとしても、さすがに今のはまずかっただろう。

かなりの罪悪感が私の中にあつた。

いくら嫌だったとはいえ友達にしかも蹴りはいけない。

私は急いで声も無しにぐつたりと地面に崩れ落ちたルチアさんを介抱しようとしたんだけど……

「……………ぐつ……………ふ、ふふ……」

……………腹蹴られたのに何で喜んでんの、この人。

「っ……………ふふ……………これで、お邪魔虫の、野郎は、今頃……！ぐへへへえ……………！……！」

しかもなんか達成感と欲望が混じったような喜びようだ。
とにかく、不気味な笑い。

そしてルチアさんは今度こそ本当に気絶した。
鼻血の後さえなければ、はかなくて綺麗な美少女なのになんともつ
たいない。

(2)・6 男たちのひんやり暑苦しいお祭り事件(後書き)

ルチアさんの最後の怪しい行動の理由は次回に。

(2) ・7 理不尽ファイティング(前書き)

ライブ視点ではないです。

(2)・7 理不尽ファイティング

「リイちゃんたらあ……。…冷たいところもすごく素敵っ！」

恋は盲目。というカルチャーナからしたら彼女がつくる顔動く姿とにかく全てが好きに繋がる。

「でもわたくしを置いてまた二人で行っちゃうなんて……。早く家に帰ってお二人に合流作戦をたてませんとっ！」

はい、彼女の中には諦めてなんかこれっぽっちもありません。

憧れのギルバートと愛しいリイブに近づくためにはどんなことだってします。

たとえば、お金がかかろうと遠出だろうと力仕事だろうと雑用だろうと、二人に少しでも好かれるのなら、なんでも。

それだけ、彼女にとっては二人に嫌われるのがすごく怖い。

…ただ、普段の行いのせいでそこまで好かれていないことに本人は全く自覚していませんが。

「…でもその前にアレ（・・・）に一言言わないと気が済みませんわ…！」

名前を口に出すのがおぞましいようです。

言い忘れてましたが彼女は今、リイブ達がいた町の外に向かって歩いていて。

急がないといけないはずなのになぜ走らないかというところ……。

「……………みたぞ……！」

突如空から下降してきた、首に朱色の首輪をつけるこの黒髪美少年、いや彼女にとって最大の宿敵ライバルに一言物申すため。

はた目からは美少女の前に天使の如く舞い降りて来た美少年、もしくは美しい恋人同士の逢瀬にしか見えないことだろう。

だが、二人は恋人同士ではなく……………『変態同士』であった。

「……また、あなたなの？ しかも鳥カラスの分際で卑しいだけでなく、こっそりのぞき見だなんて……………どこまで私とリイちゃんの邪魔をすれば気が済むのかしら……………！ リイちゃんの近くにいるというだけでも許せないというのにつ！」

「黙れ白々しいっ！！ それはこちらの台詞だ！ いつもどこでもどんなときでもあいつと俺の邪魔ばかりしおってっ！！ しかもなぜ俺よりも先にお前があいつのところにいるんだ！！！」

「……………だあって、一緒に夜を明かしたんだからあいるのは当然でしょう？ 寝起きのリイちゃんも最高だったわあ……………あの無防備な眠

気眼。少し乱した…いや、少し乱れた服。そしてあの可愛らしい寝顔に昨夜の一時！もう一生忘れられないわあ…！」

「……っ！！」

目は怪しいながらも、あえてそういう怪しい言い方をしたルチアーナ。

あえて、寝ていたリイブに薬を嗅がせたことは隠してます。

リイブの寝起きをみたことがないらしい烏の『変化タイプ』の少年タイシュ…タイラシュビルツはあきらかな嫉妬と憎悪の目を彼女に向けるが、もちろんルチアーナは知らんぷり。

「そ・れ・に、その言葉そっくりそのままお返しするわ。リイちゃんといちゃいちゃし始めた途端に、いつもいつもいつもいつも邪魔ばかり……！！！」

「貴様に言われたくないわっ！先程も俺があいつを遠目に眺めようと飛んでいればこれみよがしにあいつに……！！！」

つまりのぞき見です。

あわよくばリイブの着替えさえも見ようと近づいてました。

そしてルチアーナは、烏に変化し狼であるリイブにはれない程度の距離間でこっそりみていたタイシュを虫人にしてはあり得ない視力で捕らえたので、あえて彼女に抱き着きました。

もちろん、それを見せびらかして苦しむ彼を見て優越感を得るため

です。

タイシュに嫌がらせができてリイブに抱き着けたが、かわりに彼女に膝蹴りされる。それはまさに天国と地獄。いや、彼女にとっては天国と天国のことだった。

「それっていつのことかしら？わたくし達、しょっちゅう抱き合ってるからわかりません ああ…それにしてもさっき嗅いだいい匂いが離れなくて、もう、もううゝ……っ！！」

「最初から最後まで引つくるめて全部だ！！あと『達』ではない！あいつをいれるな！一方的に貴様から迫ってるではないかっ！！」

「あらあ、怒ってるの？当然ねえ、わたくしとリイちゃんは何たって『女同士！』なんだから、いちやいちやし放題なもの。でも、男のあなたがいきなり抱き着いたりしたらいくらリイちゃんでも怒るんじゃないかしらあ。もしかしたら嫌われちゃうかも？お気の毒うゝ」

「ふんっ！貴様こそわかつておるのか？あいつが貴様といるのはあくまでも『お友達！』だからだ。友人のいないあいつにはどこまでが境界線なのかわからぬようだが、いくらあいつでもその『お友達』を越えるような行為は認めぬだろうなあ。それにくらべて俺は男だから心さえ奪ってしまえばそれ以上の行為を許されるのだ。惨めな姿になった貴様が目に浮かぶわっ！」

「ふんっ！でもあ……あなたがリイちゃんを好きに出来る日なんて来なさそうだから安心だわあ！」

「負け惜しみも弱くなったな。先ほども言ったとおり俺は落とせば

よいだけなのだっ！貴様など確率ゼロではないか！これほど愉快で滑稽なことはないわ！」

コ・イ・ツ……ッ！

火花がちるとはまさにこのこと。

二人とも美少年、美少女の顔が激しく歪んでおります。しかしそんなことは二人にはリーブの前でないのでお構いなしです。

それから両者、しばし無言で睨み合う。

しばしといっても、5分ほど。

そして先に口を開いたのはリーブいわく、「ガムみたいにうざくべつとりくつつき厄介でいらつくめんどくさい、私のたぶん大切な友達」の方。

「行けないっ！こんなおぞましい変態真っ黒烏男に構ってられないわ！急がないとっ……！」

「変態がいえることか！それに俺は変態ではない！ただ愛情が過剰過ぎてただで変なこと何一つしてないわっ！」

ルチアーナもそうだが、タイラシユビルツも自覚してるけど自覚してないところかなりある。

ライブいわく、「偉そうで人の話を聞かず周囲を考えない、猪突猛進の騒がしい告白男」はえられないことを偉そうに叫ぶと、さらに偉そうな顔をした。

「ところで本当に急がなくてもいいのか？お前のことだ、どうせ遅れても遅刻理由を正直に話すのだろう。『主賓の姪が変態の如く相手に、それも同性にしつこく付き纏った結果、遅刻という失態』……こうなれば、謹慎でしばらく自由には動けまい。当然あやつに会うことも叶わぬなあ……。さあ！思う存分遅刻するがいいわっ！」

「くっ、うう……！あ、あなたはどうですの！？私よりも下の伯爵のくせに参加しないつもりなのかしら！？」

「侯爵はお前のおばの婚約者が手にした爵位だろうに、何を偉そうにしてる。……くっくっくっ！自分勝手に動き回った貴様と違って、俺は激しい頭痛のための療養ということで、招待状が届く数日前からすでにその日には予定が入っておるのだ！つまり自由に動ける！さあ、羨むがいい！悔むがいい！」

「か、鳥のくせに……！！汚らしい……そしてなんて小賢しい……！」

鳥だから、と差別されるのが大嫌いなタイラシユビルツもこの時はかりは上機嫌でルチアーナを見下した。

その表情にムカツ腹がたつルチアーナ。たとえ彼女が誰かに彼のことを悪く告げ口して来させようとしても、自分のような特別な身体能力を持たない彼ではどのみち時間内に会場に着くことなど到底無

理なこと。

そして彼の言うとおりでもあり、これから先リップに会うためにはここで失敗してはかならずいことになる。

「貴様はせいぜいパーティーを楽しむがいい。ついでに新たな出会いでも見つけてこい。そして二度と戻ってくるなっ！」

いつか千倍返し＋半殺しを決意し、不敵な笑みで見送るタイラシユビルツを尻目にルチアーナは風よりも早くその場を走り去った

(2)・7 理不尽ファイティング(後書き)

ちなみにルチアがカラスをタイシュだと見抜けたのは首輪のおかげです。

次回はちょっと投稿が遅くなってしまうので…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3040p/>

師匠とわたし

2011年8月6日18時24分発行